

# 子どもの主体的な遊びとしてのパネルシアター —園内研修に基づく 3 歳児クラスの保育実践からの振り返り—

Paneltheater as children's independent play  
Reflections from the practices of childcare in a 3 year-old class based on in-school training

酒井 基宏

Motohiro SAKAI

研究者による園内研修会を受講した保育者が取り組んだパネルシアターに関する実践報告となる。日常の遊びとして子どもが主体的に遊ぶ姿に着目し、保育者による援助と環境づくりを検討したところ、保育にパネルシアターを取り入れるためには「遊びのモデルとしての保育者の役割」「遊びが身近になる環境構成」が欠かせないことが明らかとなった。また、園内研修会でパネルシアターの楽しさを心から感じたことが内的動機となっていた。

キーワード：パネルシアター 園内研修 主体的な遊び 保育者の援助 環境づくり

## 1. 問題と目的

2017 年告知の保育所保育指針では、様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと<sup>1)</sup>が保育の目標として示されている。そのため保育現場では子どもたちの好奇心や想像力を刺激し、成長や発達に重要な役割を担うものとして絵本や紙芝居、ペープサートなどの児童文化財が数多く取り入れられている。中でも、自由度の高い表現手法をもつパネルシアターは、乳幼児の言葉の育ちのみならず、表現や人間関係といった幅広い領域での活用が期待されている児童文化財の一つとなっている。

パネルシアターは布地のパネル板に絵（または文字等）を貼ったり外したりしてお話、歌遊び、ゲーム等を展開して行う表現技法<sup>2)</sup>で、児童文化研究家の古宇田亮順によって 1973 年に創案された。まっ白なパネルに小さな絵がおかれて話を聞いたり歌ったりするうち、いつの間にか演者と幼児の間に暖かな関係性が育っていく<sup>3)</sup>という特性を活かし、保育・教育現場において

幅広く活用されている。八幡 (2022)<sup>4)</sup>の調査によれば、保育者養成校で使用する児童文化財を取り上げたテキストのほとんどにパネルシアターが紹介されており、絵本や紙芝居と並んで保育者が保育に取り入れるべき児童文化財として位置づいていることが読み取れる。また熊田 (2011)<sup>5)</sup>の調査では、9 割以上の保育士がパネルシアターは保育教材として必要と認識している一方、練習時間や演じる場所・機会がない理由から演じられずにいる実情を明らかにしている。

児童文化は「子どものための文化」と「子どもによる文化」の両輪から成り立ち、パネルシアターも例にもれず、子どもにも手軽に活用できるということから、“大人が与える”というだけでなく、“子ども自身が創造できる”文化財でもある<sup>6)</sup>と示されている。しかし、先行研究及びパネルシアターに関する専門書では、子どものための文化、大人が提供する文化として扱われていることが多く、子どもたちの主体性に着目した研究は散見されていない。パネルシアターに関する研究は発展途上であり、CiNii (NII

学術情報ナビゲータ) による論文検索では、同じ児童文化財の絵本が12,902件、紙芝居が1,697件、人形劇が757件であるのに対し、パネルシアターは193件と極めて少ない。内容については、パネルシアターの歴史(田中2017、藤田・松家・松原2015、藤田2013)や演じ方(松下・平嶋2018)、保育教材としての活用法(田中2021、溝口2012)に関するものが多く、実際の保育現場での取り扱いをまとめたものは見当たらない。石井・澤村はワークショップ型の実践(2019)や行事活動の導入実践(2010)を試み、日常の保育での活用法を示唆しているが、いずれも外部講師による単発的な取り組みに留まり、日々の活動と離れて別個に付加された遊びとしての位置付けであることは否めずにいる。

馬見塚(2020)はその取り扱いについて、常設の展示コーナーをつくることをお奨めします<sup>7)</sup>とパネルシアターの日常化を提言している。保育現場におけるパネルシアターのあり方を考えた際、保育者による技術的な側面だけでなく、子どもたちの生活に焦点を置いた「日常の遊びとしてのパネルシアターのあり方」を検討していく必要があると考える。子どもにとって遊びは生活そのものであり、指針や要領においても、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること<sup>8)</sup>、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない<sup>9)</sup>と示されている。そのため保育教材としてパネルシアターを保育に取り入れる場合、児童文化の定義と同様に、子ども自身が興味や意欲を持って積極的に周囲の環境に関わっていく「主体的な遊び」に着目し、保育者による援助と環境づくりを検討していく必要がある。研究者は18年の保育実践を踏まえ、2010年からパネルシアター作家として子どもの遊びを支える保育者の感性に焦点を当てながら、日常保育において子どもたちとつくるパネルシアターのあり方について、各地の自治体や保育現場で研修を行ってきた経緯がある。

本研究では、研究者が講師を務めた園内研修会に受講した保育者が、主体的に取り組んだパネルシアターに関する保育実践についての報告を行う。子ども自らが日常の遊びとしてパネルシアターを取り入れるまでの遊びの変容と保育者の関わりについて保育者と研究者で振り返り、検討していくことを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 研究デザイン

2023年度、園内研修会を実施した保育所より、パネルシアターを保育に取り入れたクラスがあるという連絡を受けて、保育者との実践アプローチが開始される。本研究は、保育者が主体的に取り組んだパネルシアターに関する保育実践について、保育記録及びインタビューから、データの収集・分析を行ったものとなる。保育者へのインタビューは、園内研修会終了のおおむね2ヶ月半後に実施した。

### (2) 対象及び研究手続き

園内研修会を実施した東京都内の私立認可保育所において、パネルシアターをコーナー保育の一つとして室内環境に取り入れた3歳児クラスを対象とする。子どもは男児13名、女児7名の計20名、保育者は3名で構成されている。保育者の保育年数はA保育士(18年)、B保育士(6年)、C保育士(6年)となる。またパネルシアターの経験は、A保育士(トラや帽子店のワークショップに行きその楽しさに触れて以降、保育に取り入れてきた)、B保育士(自身のパネルシアターの作品は持っていて何度か保育にも取り入れてきた)、C保育士(過去に保育で少し実践したことがある)となっている。

研究者はオブザーバーとして保育に携わりながら、パネルシアター研修会以降の保育記録についてクラスリーダーであるA保育士と共に保育実践の振り返りを行い、現状及び課題について検討を図った。自発的活動である遊びとして

のパネルシアターに着目し、得られた結果について、河邊（2020）が示した「子どもが充実して遊ぶ姿」①モノとかかわることによって遊びに状況を生みだしている②他の友だちの遊びを潜在的に自分の遊びに取り込んでいる③周囲の環境の特性を自分なりに取り込み遊びに生かそうとしている、「保育者の援助の視点」①モノとかかわる子どもの姿をよく見て理解すること②他の遊びとの関連性を理解すること③環境のもつ特性を理解したうえで子どもの行動の動機を探ること<sup>10)</sup>を指標として分析し、子どもの姿と保育者の援助それぞれから検討・考察をした。倫理的配慮については、千葉敬愛短期大学研究倫理規程第7条の規定に基づき「人を対象とする研究に関する計画書」の提出及び承認を受け、園の管理者に対して研究計画の概要及び個人情報に関する事項について説明を行っている。

### (3) パネルシアター研修会の概要

2023 年度、研究者が対象となる保育所に赴いて、図 1・2 に示される通り、午前中に在園児向けのパネルシアター公演（45 分）、昼の休憩時間に「子どもたちの探求心に応える保者の役割」をテーマに保育者研修（60 分）を行う。研究者が子どもの前で演じる状況を保育者が観察することにより、演じる人を含めてのパネルシアター<sup>11)</sup>を体感的に学ぶことが可能となる。保育者研修では、遊びを中心とした保育を支える保育者の専門性について、パネルシアターの実演を交えて具体的な活用方法をアドバイスする他、スライドによる講義を行った。活用方法においてはパネルシアターの制作方法や演じ方に留まらず、研究者が保育士として実践してきた、イーゼルを使用しない演じ方、コーナー保育としてのパネルシアターなど保育者目線での保育現場での取り扱いを紹介した。園内研修会終了後に寄せられた保育者からの感想の一部は次の通りとなる。

今までパネルシアターを子どもたちの前でやったことがなく、子どもたちと一緒に見て、研修を受けて、「こんなに楽しいものなんだ」と気づ

くことができました。自分の中で“作るのが難しそう”“演じるのに何回も練習が必要”と難しいものに考えすぎていたと感じました。もっと身近にあるもので作れることや自分なりの演じ方でいいんだと学ぶことができました。また、パネルシアターの基本を教えていただき、やってみよう！という気持ちも高まりました。「保育者がまず楽しむ！」ことをパネルシアターだけでなく、日常の保育に生かしていきたいと感じました。

とても楽しい時間でした！大人が演じるものはどうしても受動的になりがちで、子どもたちは楽しみつつも、楽しいがゆえに「先生、あれやって～」となり、自分で遊ぶことよりも「してもらおう」のを待ってしまうならば…とパネルシアターを控えていたところがありました。先生の研修を受講して、パネルシアターはもっと相互のコミュニケーションを深めることができるし、子どもの発想を生かせる方法があるんだということを学ばせていただきました。クラスで子どもが描いた絵をパネルにしていかが聞くと「いいよ～」とのことだったので、クッキングペーパーの方法を試してみたいと思います。

#### パネルシアター・ふれあいあそび公演

- 対象：3～5 歳児
- 時間：11：00～11：45
- 内容
  - ・ごんちゃんといっしょに手をたたきましょう
  - ・いとまき
  - ・ポコちゃんのむすんでひらいて
  - ・ふれあいあそび
  - ・だいすきむしさん
  - ・3 びきのこぶた

図 1. 園内研修プログラム①（在園児向け）

#### 保育者研修 「子どもたちの探求心に応える保育者の役割」

- 対象：職員（保育士）
- 時間：13：00～14：00
- 内容
  - ・パネルシアター実演（演じ方・作り方・保育の取り入れ方等）
    - 作品：うさぎさんときつねさん、犬のおまわりさん、おつかいありさん、ふしぎなポケット、おみせやさんのだいいなもの、のったらゴー
  - ・スライドを用いた講義（保育のパネルシアター）

図 2. 園内研修プログラム②（保育者研修）

#### (4) インタビュー内容

以下、5つの研修会前後の保育者の意識や行動についてのインタビューを行った。

- ① パネルシアターを保育に取り入れたいと思ったきっかけ
- ② パネルシアターを保育に取り入れる上でのねらいの変化
- ③ 日常の遊びとしてパネルシアターを行う上での保育環境の工夫・配慮
- ④ パネルシアターを保育に取り入れたことでの子どもの変化
- ⑤ パネルシアターを保育に取り入れることでの難しさ・悩み・課題

### 3. 結果と考察

3歳児クラスでは、研修会実施の翌週からパネルシアターを保育に取り入れている。その理由について、A保育士は次のように語っている。「子どもの遊びに取り入れるのは初めてで、それまでは自分たちが演じるものだと思っていました。公演が終わって部屋に戻った瞬間、子どもたちから「面白かったね」「やりたい」と声があり、楽しいものはやりたいんだと感じ、何を出せるか考えました」。この時期、同クラスでは保育室内の環境設定を見直していたこともあり、パネルシアターがコーナー保育の一つとして採用されている。研修会を受講してからの子どもの姿について、保育記録から抜き出して挙げていく。パネルシアター研修会を0日目とし、その経過を日数として示している。

#### 【5日目】

(保育記録) ① Pペーパーで作ったものを先に貼っておき、自由に遊べるようにした。興味をもった子たちが「酒井先生のネコとイヌのも作って」と集まる。カレンダーの裏紙に描いて渡すとすぐに貼りに行くがくっつかず「先生何とかして!」と言ってくる。そこで②研修で教わった方法で、クッキングペーパーを貼り輪郭を切って渡すと、しっかりと貼れて、とても喜んでいた。

(保育者との振り返り) パネルシアターについての捉え方の確認を行うと、「研修以前は、保育士一人で子どもを見る時間に、週に1回くらい、お迎えの前などにやっていました。その他は、年に数回ある行事の大人の出し物としてもやりました」と語っている。しかし、「②Pペーパーが高いことが一番のネックでしたが、リードクッキングペーパーでできることを知り、目からウロコでさっそく園長先生に言って買ってきました」と、身近な素材によって子ども自身でも作れて遊べることを研修会で知ることにより、「日常でパネルシアターはやってきましたが、①子どもたちがパネルシアターを本気で楽しんでいるのを見て取り入れました」と保育に取り入れるようになっている。

(研究者による考察) 下線①に示したように、保育者自身がパネルシアターに夢中になる子どもの姿に心動かされたことにより、保育教材としての有用性を見出していることが読み取れる。子どもが主体的に遊ぶためにまずは、相互主体としての保育者の存在が欠かせないことが分かる。そうした保育者の願いを土台に、子どもの自発性が引き出されるよう、思わず飛びつきたくなるような環境設定が整えられている。また、下線②では大人が提供するものとしての認識が強かったパネルシアターであるが、Pペーパーを使用せずに身近な素材で気軽に取り入れられるという新たな知見により、子どもにとっての日常の遊びとしての門戸が広がったと推察される。Pペーパーはその品質により価格帯は様々であるが、研究者がパネルシアター作家として使用しているものはB4サイズ1枚で110円ほどとなる。パネルシアターの絵人形は毛羽立ちあるフランネル布地の舞台に摩擦作用によって貼り付いており、その性質を利用して研修会では、画用紙の裏にクッキングペーパーを貼る制作方法をアドバイスした。

#### 【14日目】

(保育記録) 部屋のレイアウトを少し変えていくと話していたが、子どもの休みも多かったの



で、今日全て変えてみた。子どもたちの遊ぶ姿を見ていき、細かな直しもしていきたいと思う。  
③端っこにパネルシアターを置き、ゆっくりとできるスペースを作った。一人でゆっくりできるスペースを作ることで、落ち着いて自分のやりたいことができていたのでよかったと思う。

(保育者との振り返り) 子どもたちが継続的に遊んでいる姿を見て、「これからどうしよう? と考えるようになり、③積み木のある保育室と同じ位置づけで、パネルのコーナーをどこにするか考え、壁のある落ち着いたところを選びました」と、図3・4に示される通り、研修会終了2週間で保育室内にパネルシアターのコーナーを設定している。取り入れる前の室内環境について、「あそこには積み木がありました。背の高い棚のためか、子どもたちも落ち着かず、ゆっくりできるスペースもありませんでした」と語ってるが、「日常の遊びとして取り入れてから、みんなと遊びにくい子が③静かにほっとできる場所になり、部屋のデッドスペースがよい場所になりました」と子どもたちの活動にも変化が現れている。

(研究者による考察)「環境を通して行う保育」

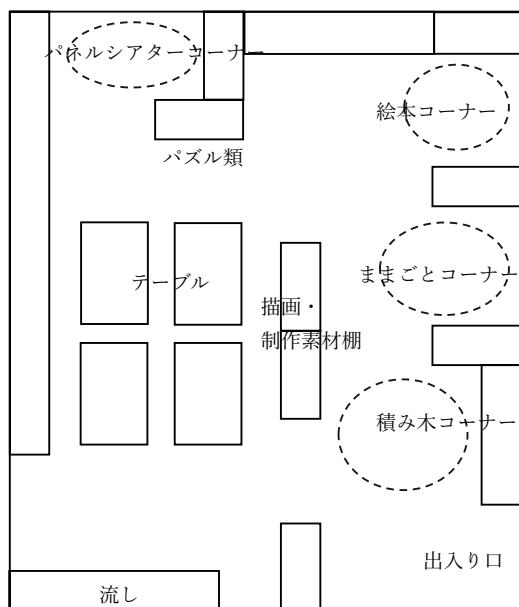


図3. 3歳児クラス環境図



図4. パネルシアターコーナー

は乳幼児期の保育の基本であるが、保育者は子どもの姿をただ傍観せずに、より子ども中心になっていくよう意図を持って環境を見つめ直している。子どもたちが本気で楽しむ姿からパネルシアターを保育に取り入れた保育者であったが、下線③に示したように遊びそのものだけでなく、保育空間のあり方にも着目している。広さや物の扱いといった物理的な視点に留まらず、子どもにとって十分な時間が保障され、自分の判断で行動できる場となるような援助の視点から保育空間を検討している。山田(2012)によると絵本コーナーは「1人でもいられる場所」として安心感を与える役割も果たして<sup>12)</sup>おり、パネルシアターにおいても保育者は同様の効果を期待していることが読み取れる。クラス全体の遊びを捉える中で、個々のモノと関わろうとする子どもの姿を丁寧に観察していることが分かる。

### 【32日目】

(保育記録) 午前中は室内で粘土、パズル、カルタ、パネルシアター作り、折り紙など、④みんなそれぞれがやりたいことを次々と見つけてよく遊んでいた。

(保育者との振り返り)「④担任3人にとって当たり前、子どもたちにとってもあって当たり前で、クッキングペーパーを「魔法の紙」と言って、ハロウィンを貼っておいたら、気づいた子から遊び出しています」と語るように、パネルシア

ターが日常の遊びの一つとなっている。また、パネルシアターを介した子ども同士の関りについて、「普段みんなの中に入りづらい子がパネルと向き合ってじっくり並べて遊んでいました。その姿を見て他の子も来るようになり、⑤友だちが楽しんで遊んでいる姿を見て「何やってるの？」と派生し、子ども同士のつながりがありました。」と語っている。

(研究者による考察) 下線④に示したように、パネルシアターがあまり変わらない生活環境として位置づいたことで、子どもたちの遊びがより充実していったと推察される。河邊(2020)によれば充実している遊びの様態について、一つの遊び(テーマ)に、ある一定期間継続して取り組み集中している<sup>13)</sup>ことを挙げているが、絵人形の制作にクッキングペーパーを用いたことで子ども自身が試したり工夫したりしやすくなり、その結果、パネルシアターで遊び込んでいく要因になったと考えられる。またコーナーという場を共有することで、下線⑤に示したようにパネルシアターが物や人といった周囲の環境との関わり方について、遊びながら得られる特性をもった保育教材であることが示唆された。

#### 【69日目】

(保育記録) 先に女の子たちが動物や果物の絵を使ってパネルシアターをして遊んでいた。しばらくしてその子たちがいなくなると、窓の所で座っていた男の子が来て、たくさんある絵の中から⑥「雲」を1枚だけ選んで貼り、持ってきた小さな人形をその下の方に持って動かし、「雨です、雨です」「キャー」と言って逃げる様子を演じていた。時折、○や△なども貼っては雨で全て流されるという遊び方をしていた。パネルシアターとその時の天候をリンクさせたり、人形の玩具として組み合わせたりして、⑦子どもの発想っておもしろい。

(保育者との振り返り) 子どもたちの遊びの変化について、「最初は目新しさに興味を持って集まりますが、じきに落ち着き、誰かがいないと違う子が遊び出して、本当にびっくりでこんなに

遊んでくれるんだと驚いています。」と語るように、一過性ではない遊びとしてパネルシアターが日常保育に定着している。遊び方も多様になり、「一人の子が⑧おままごとのフェルトの食材をパネルに貼って、それがくっついたのでみんなびっくりで、丸と四角で発色もよいので遊んでいます。」「貼るだけに留めない遊びを子どもたちは考え、⑨お店屋さんごっこのキャラクターとして取り入れたり、おままごとしてお皿に絵を載せておかずにして遊んだり、遊び方を自由に楽しんでいます。⑩絵はカゴの中にバンッと混ぜて入れて、こっちの話とこっちの話をくっつけて遊んでいます。ちゃんと探し出して遊んでいて、⑪子どもの力の面白さを感じています。」と想定外の扱いも生まれている。

(研究者による考察) 自分が興味があることや経験した記憶があるとイメージがしやすくなる3歳児<sup>14)</sup>とあるように、この時期の発達の特徴として、イメージをもって遊ぶ姿が挙げられる。下線⑥では、雨が急に降ってきた場面に遭遇した子どもがその様子をパネルシアターで表現しているが、パネルシアターの特性である視聴覚効果や自在性を生かして、周囲の環境を取り入れてイメージを膨らませて遊んでいることが分かる。過去の体験が新たな活動を生みだし、遊びがより豊かになっている。そうした子どもの姿に対して保育者は、下線⑦に示したように子どもの遊びを面白がっている。「保育者が楽しければ子どもも楽しい」は研究者自身が保育士時代に掲げていた保育の指標であるが、赤木(2019)もまた、大人が遊びに対して、「楽しみたい」と思うからこそ、子どもを巻き込んで、遊びをより遊びらしくしていくことにつながる<sup>15)</sup>と述べており、パネルシアターに限らず、保育現場において遊びがより充実していくためには保育者自身の感性も欠かすことができない。一方、「遊びを楽しくさせたい」と思うあまり、援助を焦り、保育者のイメージで遊びを引っ張ってしまう<sup>16)</sup>ことは保育者の陥りやすい視点と河邊(2020)は指摘し、「子どもを理解する力」と

「環境（遊び・活動・教材等）を理解する力」が保育者には必要と示している。インタビューの中で実践者である保育者は、「パネルの1つは持ち歩けるようにして、一人でじっくり遊んでいたりもします。」とも語っている。環境への働きかけを一方通行にせず、子どもの姿を丁寧に観察し、改善、さらなる働きかけを循環的に行っており、ただパネルシアターを保育に取り入れただけでは、このような継続した遊びとして発展していくことは難しいと考えられる。下線⑧では、パネルシアター本来の扱い方を越え、想定外の遊びが見出されている。これまでの先行研究及びパネルシアターの専門書では示されなかった新しいパネルシアターの遊び方であり、子どもたちにとって日常の遊びに位置づいたからこそ生まれた子どもによる文化そのものと言えるのではないだろうか。

#### 【77 日目】

（保育記録）クラスにパネルシアターが常にあることから、「あっ！パネルシアターだ！」「何やるのかなあ」と楽しみにしていた。団子が降りてくるところでは子どもたちも大笑いで「あ～また落ちてきた！」「次は何～？」と見ているだけでワクワクが止まらないようだった。⑨クラスのパネルシアターもさらに色々できるように、話していきたい。

（保育者との振り返り）パネルシアターが積み木やブロック、ままごと等の遊びと同等になり、「いっぱいある遊びの一つになりました。普通に遊びの一つとしてやっとなり、⑩子どもの力、何でも楽しんじゃおうとする力を感じています。」と語っている。遊びは常に変化し、保育者もそれに呼応する形で、新たな課題が浮上している。一つ目は「⑪コピー用紙なので強度がなく、すぐボロボロになってしまいます。」とPペーパーを使用しない制作方法であるが故の素材としての課題、二つ目は「子どもたちの「あれやりたい」を主軸にしたいのですが、「あれやって」「できない」と⑫年齢的に保育士に作ってもらうことも多いです。」「一番はハサミ問題です。子ど

もたちが自由に絵を描いて、自分たちで貼って切り取って遊べるようにしたいのですが、その勇気がなく、⑬まだ一連の流れにはなっていないです。今は、たまたま描いた絵を保育士がピックアップしている状態です。⑭どうしたら自分たちで描いたものを形にして貼って遊ぶことができるかと考えます。」と3歳児ならではの発達を踏まえた、主体性を育む保育者の援助としての課題である。

（研究者による考察）下線⑨に示したように、保育者自身がパネルシアターの特性を理解した上で、子どもたちが生き生きと遊ぶ日々の姿から、パネルシアターが子どもの自発性や意欲を引き出す優れた児童文化財、保育教材であると認識していることが読み取れる。これまで先行研究及びパネルシアターの専門書では保育現場での活用が謳われてきたが、行事やイベント等の単発的な取扱いが中心となっていた。小川（2010）は遊びについて、自発性があり、遊ぶこと自体が目的であり、楽しいとか喜びとかいう感情に結びつく活動であり、自ら進んで参加するもの<sup>17)</sup>と述べている。一方、パネルシアターの創案者である古宇田（2000）もまた、パネルシアターを用いて、幼児の積極性を引き出し、表現力を養い、みんなで保育の流れに関心を深め、常に生き生きとした保育が展開されることを期待する<sup>18)</sup>と述べている。つまり、パネルシアターは子どもの育ちを支えるのに有用であるが、日常の遊びとして取り入れることによって、さらにその効果を最大限に発揮することができると考えられる。保育における遊びは、その日限りのイベントではなく、一つひとつの遊びが連続して存在している。そのため、子どもが充実した遊びを得ていくために保育者は、子どもの遊びを理解し、様々な体験を積み重ねていけるような環境づくりが求められる。当初はパネルシアターに触れる行為自体を目的に遊んでいた子どもたちであるが、日常の遊びに取り入れたことで「もっとこうしてみたい」と工夫し挑戦しようとする内面の変化が現れるようになった。そ

うした姿を受け保育者は、下線⑩⑪に示したように遊び込むための支援を検討し始めている。「楽しいものはやりたいんだ」と感じてパネルシアターを保育に取り入れた保育者の願いは、子どもたちの興味関心に寄り添って遊びを捉えることで、より相応しい環境構成をクラス全体の保育課題として掲げるようになっていったことが推察される。

今回、パネルシアターに関する記録は日々の日誌からの抽出を中心に行ったが、研修会実施2ヶ月後の指導計画には「様々な絵本や紙芝居、パネルシアターなどに触れ、真似しながらたくさん言葉や表現に触れることができるようにしていく」とパネルシアターに関する表記が記されていた。今を生きる子どもの姿から保育者は遊びを全体的に俯瞰し、子どもの育ちを見通すために長期的な視点が備わってきたことが読み取れる。子どもの遊びの変容は保育者の援助をも変容させる。保育の計画は援助の方向性を確認していくものとなるため、日々の保育記録だけでなく、今後は週案や月案の視点からもパネルシアターのあり方を検討していくことは大変興味深い視座になると考えられる。いずれにしても保育者が指導計画上にパネルシアターを取り入れたことは、パネルシアターが子どもの育ちを支える遊びとして有用性が高いことを示していることに他ならない。

#### 4. 総合考察

本研究では、園内研修後に保育者が主体的に取り組んだパネルシアターに関する保育実践について、保育記録及びインタビューによりデータの収集・分析を行い、子どもの遊びや保育者の関わりの変容について検討することを試みた。子どもたちが主体的に遊ぶ姿に着目し、保育にパネルシアターを活用していくための知見として、以下の2点が得られた。

##### ●遊びのモデルとしての保育者の役割

保育者自身がまずはパネルシアターの楽しさを知っている必要がある。保育現場における遊びには保育者が存在し、子どもの姿に応じて遊びが充実していくよう援助の役割を担っている。子どもたちの遊びは無の状態から作り出しているのではなく、遊びの源泉となる豊かな体験があること、遊びを引き出す環境が整えられていること、社会的なやりとりが身近にあることが欠かせない。保育における人形劇の活用について山田・古相（2016）は次のように述べている。最も身近な存在である担任が演じる人形劇は安心感と親近感があり、自らが演じた人形を保育者が操ることは共有体験となり、子どもと保育者の間に一層の信頼関係を深める効果がある<sup>19)</sup>。つまり、子どもたちの遊びが豊かにつくられていくためには、憧れを土台とし、保育者自身がワクワクドキドキする当事者性、楽しさの共感性が求められると考えられる。本実践では、保育者自身のパネルシアター経験に加え、園内研修において子どもの前で研究者が演じる場面を観察することによって、「こんなに楽しいものなんだ」「保育者がまず楽しむ!」とパネルシアターの楽しさを心から感じたことが契機となっている。

##### ●遊びが身近になる環境構成

全国私立保育連盟による令和4年の物価高騰サポート調査<sup>20)</sup>によると、保育材料費や消耗品費について多くの保育所や子ども園では自治体からの経費の補助検討がなされておらず、環境構成にかかる諸費用の捻出には各保育現場の厳しい現状が伺える。そうした中で、研修会で知り得た安価な素材でつくるパネルシアターは、保育者、子ども双方にとって気軽に試してみたいと思える実践につながった一つの要因と考えられる。子どもたちの充実した遊びを支えるためには、時間や空間の保障のほかに、こうした保育者のアイデアを欠かすことはできない。



また本実践では、パネルシアターをコーナー保育の一つとして室内環境に取り入れたことも大きな要因となっている。パネルシアター自体、貼付（貼ったりはずしたりできること）や移動（絵人形が位置交換・転回・分解・集合等できること）といった自由度の高い表現手法をもつことから、子どもが自分たちで遊びを試したり工夫したりすることのできる、主体性の優位な児童文化財、保育教材と捉えることができる。しかし、こうした特性も、保育者が子どもの遊びを丁寧に観察し、意図をもって継続的に環境へ働きかけなければ、目新しい遊びのままで終わ

り、子ども自らが進んで取り組む遊びとして定着していかないと考えられる。パネルシアターコーナーとして日常の遊びに位置づけたあとも、保育空間を意識した移動式パネルの導入や、つくる・演じるを分けない一貫性ある遊びとしてのパネルシアターなど、遊びの充実に向けた教材研究の検討がなされている。

改めて、河邊（2020）が示した「子どもが充実して遊ぶ姿」「保育者の援助の視点」に前項の「保育記録及び保育者との振り返り」の要点を照らし合わせたものが表 1 となる。

「保育者の援助の視点」は「子どもが充実して

表 1. 河邊（2020）の定義における本実践の位置づけ

河邊（2020）の定義		3 歳児クラスの保育実践	
子どもが充実して遊ぶ姿	モノとかかわることによって遊びに状況を生みだしている	下線④	みんなそれぞれがやりたいことを次々と見つけてよく遊んでいた
	他の友だちの遊びを潜在的に自分の遊びに取り込んでいる	下線⑤	担任 3 人にとって当たり前、子どもたちにとってもあって当たり前
	周囲の環境の特性を自分なりに取り込み遊びに生かそうとしている	下線⑥	「雲」を 1 枚だけ選んで貼り、持ってきた小さな人形をその下の方に持って動かし、「雨です、雨です」「キャー」と言って逃げる様子を演じていた
		下線⑧	おままごとのフェルトの食材をパネルに貼って、それがくつついたのでみんなびっくり お店屋さんごっここのキャラクターとして取り入れたり、おままごととしてお皿に絵を載せておかずにして遊んだり、遊び方を自由に楽しんでいます 絵はカゴの中にパンッと混ぜて入れて、こっちの話とこっちの話をくつつけて遊んでいます
保育者の援助の視点	モノとかかわる子どもの姿をよく見て理解すること	下線①	P べーパーで作ったものを先に貼っておき、自由に遊べるようにした 子どもたちがパネルシアターを本気で楽しんでいるのを見て取り入れました
		下線②	研修で教わった方法で、クッキングべーパーを貼り輪郭を切って渡す P べーパーが高いことが一番のネックでした
		下線⑩	コピー用紙なので強度がなく、すぐボロボロになってしまいます
		下線⑪	年齢的に保育士に作ってもらうことも多い まだ一連の流れにはなっていない どうしたら自分たちで描いたものを形にして貼って遊ぶことができるかと考えます
	他の遊びとの関連性を理解すること	下線③	端っこにパネルシアターを置き、ゆっくりとできるスペースを作った 積み木のある保育室と同じ位置づけ 静かにほっとできる場所
	環境のもつ特性を理解したうえで子どもの行動の動機を探ること	下線⑦	子どもの発想っておもしろい 子どもの力の面白さを感じています
		下線⑨	クラスのパネルシアターもさらに色々できるように、話していきたい 子どもの力、何でも楽しんじゃおうとする力を感じています

遊ぶ姿」に対して応答的に変化している。子どもがパネルシアターで感じた楽しさ・面白さに保育者自身が共感し、本実践は取り組まれた。パネルシアターと関わる子どもの姿からパネルシアターの特性を理解し（下線①②）、日常の遊びとしてコーナー保育に位置づけている（下線③）。パネルシアター自体が言葉や表現、人間関係の育ちに有用性を持つが、継続的に集中できる環境を整えたことで、一人ひとり遊びのイメージが膨らみ、友だちとの関わりだけでなく、遊びそのものも豊かになっている（下線④⑤⑥⑧）。子ども理解に基づいて保育者自身も遊びを楽しみ（下線⑦）、新たな保育の課題を掲げて模索していた（下線⑨⑩⑪）。河邊（2020）は子どもの主体性と保育者の関係性について、次のように述べている。常に保育者による理解と援助との関係のなかで子どもの主体性は育つのである。今回の保育実践から、子どもの主体的な遊びとして保育にパネルシアターを取り入れるためには、保育者の子ども理解と環境への理解が欠かせないことが明らかとなった。そのためにはまず、子どもと保育者が共に夢中になる内的動機づけが必要となり、本実践は保育者による主体的な取り組みではあるが、「こんなに楽しいものなんだ」と子どもと保育者の心を動かした園内研修がその一助になったのではないかと考えられる。

## 5. 今後の課題

本研究では園内研修を契機に日々の保育実践へと展開したことが示されたが、実践者である保育者は普段からパネルシアターを保育に取り入れている経験者であるため、同研修を受講することによって同様の研修効果を得られるかは不明である。また、保育記録と保育者のインタビューから子ども・保育者の意識と行動変容は明らかとなっているが、考察については研究者単独で行われており、実践過程において研修内容がどのように影響し活かされていたのか、保

育者と研究者による相互の検討を重ねていく必要がある。

パネルシアターのどのような特性が子どもと保育者の心に作用し、日常の遊びとして根付いて展開されていくのか。技術面的方法論ではなく、保育者が子どもに合わせて提供する活用論に着目していくためには、研究者が保育者をサポートし、実践を同時に行うアクションリサーチ手法が有効と考えられる。パネルシアターを保育に取り入れる保育環境について検証を重ねていくことで、保育者と研究者が共同し、子どもの主体的な遊びを支えるパネルシアターに関する園内研修プログラムを開発していきたい。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018
- 2) 古宇田亮順編『実習に役立つパネルシアターガイドブック』萌文書林、2009
- 3) 古宇田亮順『パネルシアターを作る傑作選』大東出版社、2013
- 4) 八幡真由美「子どもの豊かな言葉を育む児童文化財の活用に関する研究」『国立音楽大学紀要（56）』、2021
- 5) 熊田武司「保育士のパネルシアターおよびエプロンシアターへの意識について」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要（43）』、2011
- 6) パネルシアター委員会編『夢と笑顔をはこぶパネルシアター』浄土宗、2011
- 7) 馬見塚昭久『保育実践に生きる「言語表現」』萌文書林、2020
- 8) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018
- 9) 厚生労働省前掲書（2018）
- 10) 河邊貴子『遊びを中心とした保育—保育記録から読み解く「援助」と「展開」—』萌文書林、2020
- 11) 関稚子『いいねいいねパネルシアターであそぼ』大東出版社、2007

- 12) 山田恵美「幼児の活動の展開を支える保育環境」『日本保育学会保育学研究 (50)』、2012
- 13) 河邊貴子前掲書 (2020)
- 14) 赤木和重ほか『どの子にもあ～たのしかった！の毎日を一発達の視点と保育の手立てをむすぶ』ひとなる書房、2017
- 15) 赤木和重「遊びと遊び心の剥奪」『遊び・育ち・経験—子どもの世界を守る』明石書店、2019
- 16) 河邊貴子前掲書 (2020)
- 17) 小川博久『遊び保育論』萌文書林、2010
- 18) 古宇田亮順「パネルシアター」『〈改訂〉子どもと言葉』萌文書林、2000
- 19) 山田裕美子・古相正美「保育における人形劇の活用—その歴史と現状—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 (48)』、2016
- 20) 全国私立保育連盟『全国私立保育連盟調査部『物価高騰サポート調査』、2022 ([https://www.zenshihoren.or.jp/files/research-tyousa\\_20221118.pdf](https://www.zenshihoren.or.jp/files/research-tyousa_20221118.pdf)、2023年11月26日閲覧)

## 謝辞

本研究は、東京都江東区にある社会福祉法人みわの会 MIWA シンフォニア保育園のご協力により実現しました。心より感謝申し上げます。